

第3回（仮称）札幌市映像基本計画検討委員会 会議概要

1. 日時

平成28年1月13日（水）16:00～18:00

2. 場所

札幌市役所18階 第三常任委員会会議室

3. 出席者

(1) 委員

伊藤委員長、樋泉委員、津嶋副委員長、山野委員、中島委員、鈴木委員

(2) 札幌市職員

経済局長、経済局国際経済戦略室長、経済局国際経済戦略室コンテンツ産業担当課長 ほか5名

4. 次第

(1) 開会

(2) 議事

映像のまち札幌推進プラン骨子案について

(3) 閉会

5. 会議概要

(1) 映像のまち札幌推進プラン骨子案について

第2回目までの議論を踏まえ、事務局から議事の関連資料について説明を行った。

(2) 各委員からの意見

【中島委員】 資料で提示されている映像産業の範囲を教えてください。

【事務局】 総務省でまとめている日本標準産業分類の「公共放送業」、「民間放送業」、「映像情報制作・配給業」、「映像・音声情報制作サービス業」、「映画館」を映像産業として位置付けている。

【中島委員】 市民の意識調査は経年で取っているものなのか。

【事務局】 平成25年度に実施した単発調査。経年でのデータは取っていない。

【中島委員】 フィルムコミッションができて14年ほど。この数字は、フィルムコミッションが市民に浸透したことを示すものだと思う。

【山野委員】 映画「探偵はBARにいる」の撮影があった時から市民の意識が確実に変わったと感じている。

【中島委員】 エキストラ登録制度は今はどうなっているのか。過去にはあったと思うが。

- 【事務局】 既に準備を進めており、年度内にスタートさせる予定。
- 【中島委員】 映画だけではなく、芸術文化に関しては、伝える、届ける、といったことができるマネジメント能力を持った人材の不足が課題。
- 【伊藤委員】 退職したシニア世代は、地域を題材とした色々な映像作品を作っている。ただし、アウトプット、上映する場所がないといった課題がある。インターネットで色々と探せる世代ではなかったりするので、そういう意味では、ちえりあ（札幌市生涯学習センター）や図書館という場所は有効なのかもしれない。
- 【樋泉委員】 大事なことは場を作ること。もう一つは、広く市民の目にさらされるということだ。一般に見られて評価されるということが大事で、競争原理が働かないと人材は育たない。
- もう一つ感じることは、リタイアした団塊の世代の人達のリソースを上手く活用すること。そういう人達を上手に使うことで、次世代の表現者を育てていく場を作る必要がある。育てる、さらす、鍛えるということを長期的に担保していくことが大切である。
- 【中島委員】 「Sapporo Movie Sketch」に関するアイデアだが、いい企画であれば300万円を出すといたように、企画の内容によって交付する金額に差をつけてはどうか。また、市民向けの上映会を実施することを条件付けして、市民に評価してもらうといった方法もいいかもしれない。
- 【樋泉委員】 表現する場を作るといことはとても大切なことで、ワークショップは、政策としてきちんとやっていくべきだと思う。
- 【伊藤委員】 ちえりあや図書館など、現場でワークショップをやっている人達にヒアリングを行い、どこに課題があるのかを把握する必要がある。
- ワークショップは、受講人数が少なくてもどんどんやっていくべき。5年、10年と長いスパンで見れば、こうした積み重ねが札幌市の自力をつけていくことにつながる。
- それから、これは直接は関係ないかもしれないが、サブカルチャー周辺の人達のメンタリティが変わってきている。昔は漫画の即売会やコスプレイベントなどは、オープンな場で行われていたが、最近は閉鎖型でやっていることがわかってきた。動員数、人材ともに大きく、動くお金自体も大きいので、このようなイベントなどを上手く活用できれば、地域活性化につながると思う。
- 【伊藤委員】 企業誘致に関して補足説明があれば事務局から説明をお願いしたい。
- 【事務局】 首都圏の映像プロダクションの一部やアニメの制作部門の一部などの誘致をイメージしている。
- 【伊藤委員】 このことについて他の委員の意見もお聞きしたい。
- 【津嶋委員】 結局は、地場の映像プロダクションがどれだけいいものを作れるかという勝負になってくる。札幌の魅力を発信する時に、自分達の手で発信をするのか、人の手を借りるのかという違いであって、結果的に札幌の魅力が発信されれば手段は問わなくても良いと思う。

【伊藤委員】 ほかの委員はどうか。

【中島委員】 スタジオ構想があっても良いかもしれない。ロケだけではなく、最後の仕上げの部分を札幌でできないかといつも考えている。一方で、機材関係は技術革新のサイクルが早く、機材への資本投資は難しい部分がある。アニメーションの分野はどうなのか。

【伊藤委員】 スタジオを維持することは本当に大変。北海道の人材の強みと弱みを把握し、そこからどうすべきかを考えていく必要がある。

【樋泉委員】 ハードに投資するよりも人に投資した方が良い。時々、東京の表現者から札幌に移住したいという相談を受けることがある。

環境を整えてあげれば、札幌にぜひ来たいという人達はいるし、可能性はあるのではないかと。大事なことは札幌に表現者が集まり、札幌が刺激を受ける街であるということだ。

【伊藤委員】 ほかの委員の意見はどうか。

【山野委員】 札幌コンテンツ特区の精神を受け継ぐのだとすれば、国内だけではなく、もっと広い視点で誘致を考えた方が良い。

【伊藤委員】 ここまで話を聞いていて ICC のことを思い出した。当初は、デジタル創造プラザとしてデジタル技術による新業種のインキュベーション施設であったのが、徐々に文化施設になっていって、その時におもしろい人材が随分くるようになった。場を作るという意味では、箱物もあった方が良いのかもしれない。

ただ、最新式のスタジオは民間で既にあると思うし、行政の役割としては、例えば岩佐ビルや卸センターのような場所で、空きスペースを安く貸すなどした方が若い人が集まって良いのではないかと。

【中島委員】 将来に向けて表現道場のようなものを作って行くのはどうか。それから、やはり取組の可視化が大切だ。そうした取組と地域の課題とを上手く絡めると良い。

例えば、地域と行政がお互いにお金を出し合って、1本の短編映像を作るといった試みはどうか。毎年1本、地域と一緒に短編を作っていくようなプロジェクトがあれば、市民にとってもわかりやすいのではないかと。

【樋泉委員】 「探偵はBARにいる」のプロデューサーの須藤氏は札幌出身。北海道や札幌出身の業界人のネットワークを上手く活用した方が良い。北海道出身や北海道が好きな業界人は多く、そうした業界人のネットワークを上手く活用してワークショップを行うと良いのではないかと。また、単発の取組ではなく、継続することが大切。

【伊藤委員】 ワークショップに尽きるという気がする。

「Sapporo Movie Sketch」に関して言えば、金額を固定しないで欧米の助成制度と同じように、上限額、あるいは、総額を決めて助成するといった方が良いかもしれない。

【中島委員】 2017年の札幌国際芸術祭と連携するのも一つの方法。

【山野委員】 市民参加型にしてはどうか。

- 【中島委員】 クラウドファンディングと市の助成を組み合わせる映像制作への支援を行うことは可能なのか。
- 【事務局】 可能。
- 【中島委員】 そうしたことが可能だと自由度が増して良いと思う。
- 【山野委員】 市民参加型になるし、出口が確約されているとなお良い。市民が参加したものが放映されれば、まさに取組の可視化になる。
- 【樋泉委員】 市民参加型というのはとても大事な要素だ。最終的な目標は、全ての市民の表現力を高めていくこと。
せつかく条例を作ったのだから、限られた人が限られた場所でやっても意味はないし、大きな動きにすることで札幌がさらに魅力的な街になっていくのだと思う。表現者を増やしていくことが大事。
- 【伊藤委員】 札幌市政のPR番組の枠はどれくらいあるのか。
- 【事務局】 長いので30分、短くて5分や10分程度だと思う。
- 【伊藤委員】 予算もあるので難しいとは思いますが、その時間枠を単純に増やすということが重要だと思う。「映像のまち」を宣言するのであれば、市自体が映像メディアを使いこなし、露出を増やしていく必要がある。
- 【中島委員】 札幌のフィルムコミッションの方向性をお聞きしたい。方針が定まらなると効果的な誘致はできないと思う。北九州のように何でも受け入れる体制とするのか、それとも作品を選んでいくのか。
- 【事務局】 基本的な間口は広くしていく。ただし、民間のロケーションコーディネーターもいるので、民間事業者とも連携しながら全体で受けていくことになると思う。全ての案件をフィルムコミッションが引き受けるとなると、担当者が何人いても足りなくなってしまう。
- 【伊藤委員】 ほかに意見はないか。
鈴木委員、個人的にやってもらいたいことでもいいので、何か意見をお願いしたい。
- 【鈴木委員】 札幌の魅力は何だろうかと考え、なかなか思いつかなかったが、印象に残っている場所で考えるといくつか出てきた。例えば、大通公園の黒い滑り台、札幌駅であれば、待ち合わせ場所になっている白い石のオブジェ。
知っている場所が映画に出てくれば子供たちも嬉しいし、道外の人が札幌に来た時に、ここは映画に出てきた場所だと認識すれば、それは札幌の魅力が伝わるということではないか。
確かに大人が目線も必要だが、子供たちが見て、共感できるものにするのが今後の人材育成につながっていくのではないかと思う。
- 【伊藤委員】 確かに子供たちの目線というのは大事だと感じた。子供たちが地域に感情移入できない事例は、エンターテインメントとして魅力のある映画ができたとしても、どこのロケ地でも同じになってしまう。
大学の卒業生で「デジモン」のキャラクターデザインなどをやっている宇木敦

哉君というクリエイターがいるが、彼の監督映画「センコロール」が若者に支持されたのは、麻生や手稲あたりの風景が出てくるといったことも理由の一つになっている。いい作品は感情移入できる目線が必要。

(3) 総括

【伊藤委員】 メンバーは変わるかもしれないが、こうした場は継続していくことが大切だと感じた。参加してとても刺激になった。

(4) 閉会